

# おん 音 韻

on in

phonology = ①抽象化された音声。言語体系を形づくる記号として音声から抽象される音韻の体系。 ②音韻論。  
phoneme = 観念としての言語音。また、その単位。  
phonemics = 音韻論

定 義： 言語音を観察するとき、人の脳内に言語記号として記憶されている音の概念を音韻と呼ぶ。ある一つの言語集団の中では、言語として用いる音の種類が共通でなければ通用しない。しかし実際の会話では、いくら同じ音を発音しようとしても、個人差があり、同じ人でも発音するたびに音が少しずつかわる。全く同じ音を再生産することはできないのである。そこで、ある基準に添って、その範疇に入るように発音し、聞き取る。その基準となる音の概念が音韻である。人は、音韻に添って音声を発音し、発音された音声を音韻にあてはめて聞き取るのである。音韻を研究する学問を音韻論と言う。

記号としての声： 人は音韻を記号として用いている。語の意味は、語の発音によってあらわされるように見えるが、厳密に言うそうではない。音韻は、それ自体が意味をあらわすのではなく、音韻の相違が意味の区別に対応するのである。意味を区別するはたらきを弁別と言う。たとえば「勝ち」と「待ち」という二つの語の意味は、それぞれの最初の子音が相違することによって弁別されている。この場合の二つの子音のように、音韻は互いに対立し、その対立によって意味を弁別するのである。同じ二つの子音の相違は、別の音韻と組み合わせると、たとえば「蚊」と「間」なども弁別する。わずかな種類の声が音韻として選択され、その組み合わせによって無限の種類の意味が弁別できるのである。

音韻の単位： 音韻は、それ自体は意味を持たず、その組み合わせが意味に対応する音または音連続の概念である。具体的には、子音・母音や音節などの単位を指す。語や語の要素（→形態素）より大きい単位は、それ自体が意味を持つので、音韻ではない。ただし、音韻のなかでも子音・母音にあたる最小の単位を音素と呼び、音節のようにもう少し長い単位までを総称して音韻と呼ぶこともある。

弁別特徴： 音韻は具体的な音声を基盤として概念化される。音韻の実体化したものが音声である。それぞれの音声の持つ性質の束のうちには、弁別のために必要な要素と余剰な要素とがある。必要な要素を弁別特徴（distinctive features）と呼ぶ。たとえば「蚊」と「蟻」の意味は最初の子音 [k] と [g] によって区別されるが、[k] と [g] の調音運動は共通点が多く、無声か有声かの違いが区別の決め手である。このとき、無声と有声の対立が弁別特徴である。言い換えると、音声 [k] と [g] は、無声対有声という弁別特徴によって音韻として対立するのである。弁別特徴の内容は言語によって異なる。無声と有声の相違は日本語では弁別的だが、中国語では余剰である。中国語では無気と有気の相違が弁別的だが、日本語では余剰である。そのため、中国語話者の日本語は「電車」がテンシャになり、日本語話者の中国語は「倒」と「討」が区別できないようなことが起きる（参考文献は「音声」の項参照）。

（犬飼 隆）